

第2章 棚倉町及び棚倉城跡の概要

第1節 棚倉町の概要

1 社会的環境

当町は福島県南部、東白川郡の北部に位置し、県庁所在地の福島市から南へ約94km、首都の東京からは約200kmの距離にあり、東北地方の南端で関東圏内から比較的近い位置にある。町の東側は鮫川村・浅川町、西側は栃木県那須町・同大田原市、南側は塙町・矢祭町・茨城県大子町、北側は白河市が接し、総面積159.93km²、東西に19.6km、南北に17.4kmとなっている。

公共交通では鉄道と路線バスが運行している。鉄道においては、当町を南北に縦断する水戸市と郡山市を結ぶJR水郡線が運行している。また、町内には磐城棚倉駅・中豊駅・近津駅の3つがあり、磐城棚倉駅が町の主要な駅となっている。また、路線バスでは、現在JRバス白棚線が運行している。また、他に東白川郡内と当町と白河市・塙町・矢祭町を結ぶ福島交通バスもあり、農村地域から中心地を繋げる大切な交通機関とされている。

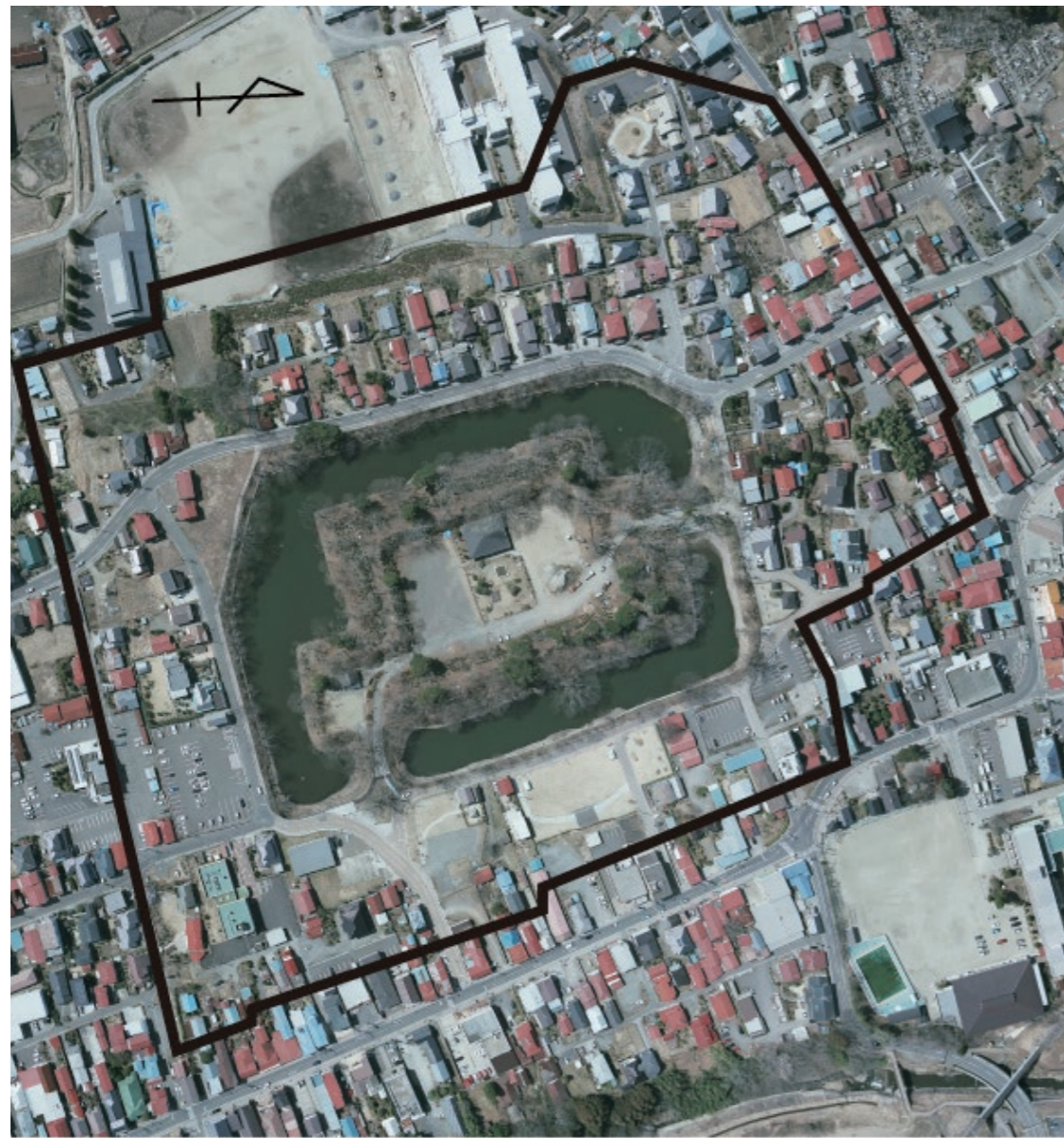
当町を通る基幹道路としては国道118号線・289号線がある。この2つの国道は他地域から当町の中心まで繋ぐ、町民の生活に欠かせない重要な道路となっている。



第1図 棚倉町の位置図

2 地理的環境

当町の東部は阿武隈高地に連なり、西部は八溝山地に囲まれ、中央に久慈川が流れ市街地は久慈川谷低地（八溝地溝帯）に形成されている。また、当町には、東北、西南日本の地質を二分する破碎帯があり、この破碎帯を「棚倉破碎帯（棚倉断層）」といい、東北最大の構造線に一致すると言われている。なお、当町の特徴として福島県中通りとしては珍しく、阿武隈水系ではなく久慈川水系に含まれており、地域的なまとまりとしては茨城県に近い様相を呈している。棚倉城跡は、当町の中心市街地に位置し、北には中世城館の赤館跡がある。本丸平場の平均標高が264mで台状の地形に城下町とともに構築されている。この台地は西にある八溝山を源流とする久慈川が作り出した河岸段丘でもある。



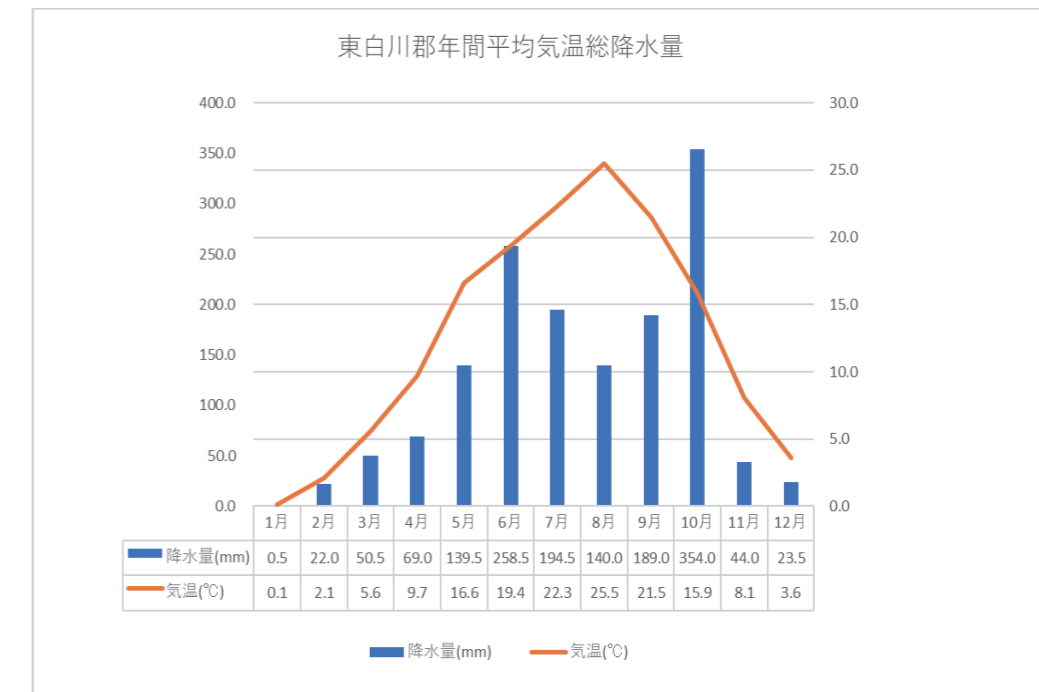
第2図 棚倉城跡航空写真

棚倉城跡埋蔵文化財包蔵地範囲

3 自然的環境

当町（東白川郡）の気候は、清涼さわやかな気候にあり、冬は温暖で四季を通じて極めて住みよい自然環境を有している。当町はおおむね太平洋型気候に属し、年平均降水量は約1,400mmで、全国平均約1,700mmより少ない傾向にある。また、東白川郡は、久慈川流域の温暖な気候の影響のためか、梅雨時期から台風の時期にかけて降水量が多く、6月から9月の4か月で年降水量の50%に達している。当町は東北部の冷温帯気候に属してはいるが、年平均気温は11℃程度となっており、更に積雪量は少なく四季を通じて比較的温暖な気候となっている。

第1表 東白川郡の年間平均気温及び総降水量（気象庁ホームページ 気象統計情報より作成）



4 植生

当町の総土地面積15.993haに対し、森林の面積が11.917haあり、町内の約7割が森林となっている。また、八溝山（標高1,022m）から八溝山脈と奥羽山脈が連なり、森林に恵まれた地域となっている（農林水産省統計情報）。町の基本的な植生は、スギ・ヒノキ・マツといった樹種で形成されている。

棚倉城跡は、当町の中心市街地に位置し、本丸平場の平均標高が264mで台状の地形に城下町とともに構築されている。この台地は西にある八溝山を源流とする久慈川が作り出した河岸段丘でもある。本丸を中心に、サクラ類、ケヤキ、カエデ類、ツツジ類などの樹

木が多数存在する。二ノ丸にはケヤキの大木もあり、本丸跡入口付近には都々古別神社(馬場)の神木であったとされる県指定天然記念物「棚倉城跡の大ケヤキ」が存在する。

5 歴史的環境

原始・古代

当町を西から南へ流れる久慈川は、奥久慈の最高峰である八溝山(標高 1,022m)を源流とし、その流れは遠く常陸(茨城県)を通り、太平洋へと至る。

この久慈川沿いを中心として、当町には原始・古代より多くの遺跡が確認でき、古くから人々が生活していたことがうかがわれる。縄文時代には中期から後期の遺物が数多く出土した高渡遺跡などいくつかの遺跡があり、弥生時代の遺跡では標式土器の「棚倉式土器」が出土した崖ノ上遺跡が有名である。また、古墳時代には石室から人骨や骨鏃が出土した胡麻沢古墳のほか、塚原古墳群、堤古墳群などがある。奈良時代になると、遺跡のほかにも古文書や古記録によって人々の生活を知ることができる。この時期の代表的な遺跡は、大規模な集落跡である松並平遺跡や、東北における古代仏教の一拠点である国指定史跡の流麩寺跡である。弘仁2年(811)に当町を含む東白川郡に長有・高野の2駅が設置され、常陸国から陸奥国に至る官道が設けられる。これにより陸上交通が整備され、既に存在した久慈川の水上交通に加えて交通量の増大を当町にもたらした。

平安時代中期に編さんされた辞典である『倭名類聚抄』によれば、当町を含む東白川郡一帯が白河郡から分かれて「高野郡」という行政区分で呼ばれていたことがわかる。この時代に当町は「入野(伊野とも)」と呼ばれていた。さらに歴史書である『続日本後記』や古代における法典集の『延喜式』を紐解くと、この頃に都々古別神社(現在の馬場・八槻都々古別神社)が成立したとされる。当時は、非常に高い格式を有し、その勢力は大変大きく、神事などの費用にあてるための神領として、鎌倉時代まで高野郡全域を直接支配するほどであった。

中世

中世になると、山林を中心に修行を重ねる修験者による独特な宗教文化が形成される。修験道は、山林に入り修行を積むことで呪力を体得することを目的とした神仏混合の民間宗教で、馬場・八槻都々古別神社などが中心となり、東北における一大宗教拠点となっていた。一方で政治の面では、白河結城氏が高野郡の地を治めるようになる。白河結城氏は平安時代の末の奥州合戦の功績から白河郡を恩賞として賜って以後、鎌倉幕府との関係を密にしながら支配体制を固めていった有力氏族である。その支配は長きに及び、戦国時代になると常陸より侵攻してきた佐竹氏といった他の有力氏族との激しい戦闘が繰り返された。この頃周辺の日々では中丸館や赤館、寺山館といった館や山城が次々と築かれた。

近世

江戸幕府の成立後の慶長11年(1606)に、立花宗茂が赤館城主として初代藩主となり当地を治めることとなる。宗茂は、馬場・八槻都々古別神社の朱印状取得に尽力している。

元和8年(1622)に、新たに藩主となった丹羽長重は寛永2年(1625)に棚倉城を築城した。長重は、周囲の地形より高い久慈川の河岸段丘に立地していた馬場都々古別神社の境内に着目し、神社を現在の社地に遷宮して新規築城した。天然の要塞のような地形が城を造るにあたって絶好の場所であり、古代から続く都々古別神社が宗教権威として民衆まで大きな影響力を持っていたことを利用したとも考えられている。

また、内藤家の藩主時代には、城下町の整備も進み、水戸街道、平潟街道、奥州街道、伊王野道等が通る交通の要衝としての地位を確立した。寛永6年(1629)に紫衣事件が発生すると、京都大徳寺の住職を務めた玉室宗珀は流罪となり、棚倉藩へ預かりの身となった。当時の藩主内藤信照は赤館城跡の南麓にあった光徳寺境内に庵を設け、手厚く世話をを行い、親睦を深めたとされている。以後、棚倉藩の統治は内藤家(3代)、太田家(1代)、越智松平家(1代)、小笠原家(3代)、井上家(2代)、松井松平家(4代)と続き、最後は阿部家(1代)であった。

歴代藩主は、領内の寺社仏閣を手厚く庇護しており、内藤信照は光徳寺を建立、太田資晴は長久寺へ棚倉城の南門を寄進、松平康爵は山本不動尊へ石灯籠の寄進を行っている。

近代

慶応2年(1866)、白河藩主の阿部正静が棚倉藩主となる。慶応4年(1868)、棚倉藩は奥羽越列藩同盟の一員として戊辰戦争に参加する。白河小峰城の攻防戦において、棚倉藩は阿部内膳率いる「十六ささげ隊」などが活躍するも白河小峰城は落城する。

白河小峰城が落城すると新政府軍は攻撃目標を棚倉藩に定め、板垣退助が率いる薩摩藩・長州藩・土佐藩・忍藩・大垣藩らの兵約800人が棚倉城へと進軍した。一方、城には前藩主阿部正外が率いるわずかな手勢がいるのみであり、仙台藩・三春藩等の援兵が得られなかったため、正外は落城必至と考え、新政府軍の拠点になることのないよう城に火を放ち、分領へと逃れた。その後、新政府軍は城下に進駐し、板垣は蓮家寺を本拠とし民政にあたる。

明治時代に入り、戦乱後の当地域は少しずつ復興を遂げる。明治2年(1869)、版籍奉還が行われると阿部正功が藩知事となり、明治4年(1871)、廃藩置県が行われると棚倉藩は廃止され棚倉県として新たに行政機構が整えられていった。その後は、明治9年(1876)、福島県へ編入、明治22年(1889)、町政の開始とともに行政機構が整理され、東白川郡域の中心として機能していくこととなった。

明治2年(1869)、9月2日、当時の棚倉藩知事であった阿部正功は、戊辰戦争後に藩士等の子弟を教育することを目的として、旧白河藩校と同名の藩校「修道館」を設置し、文武両道に分かれて教授した。分校(郷校)が5箇所あり、生徒の概数は寄宿生20名、通学者200名、分校150名であった。教科書と諸規則は白河藩校時代と同じと伝わる。毎月一度、試験を行い、学力により一等から四等まで級別に区分していた。明治4年(1871)10月、当町が平県の管轄となった時に廃校となるが、その後、明治5年(1872)の学制発布と同時に、修道館の講堂跡を校舎として修道小学校が開校し、明治6年(1873)に棚倉小学校と改称し、現在に至っている。

東白川郡の中心となった当町は、近隣町村に比べて近代化が進んだ地域といえる。産業面では、明治21年(1888)に棚倉製糸会社、明治34年(1901)には上台葡萄酒醸造株式会社が発足したが、赤字経営が続き大正年間には廃業している。また、瀬ヶ野区と小爪区の炭鉱において石炭の採掘が行われており、第二次世界大戦直後まで採掘されていた。金融面では、明治12年(1879)に棚倉協同株式会社、明治23年(1890)に棚倉銀行が創立されており、前者は現在の東邦銀行につながるものである。

交通の面では、大正5年(1916)に白棚軽便鉄道が営業を開始した。しかし、昭和7年(1932)に大郡線(後の水郡線)が当町まで敷設されると、白棚線は経営悪化に拍車がかかることとなり、昭和11年(1936)に政府借上、昭和19年(1944)にレール撤去となった。現在、白棚線の軌道跡はJRバス関東白棚線の一部専用道路となっている。

現代

満州事変以後、当町でも戦時体制が強化され物資統制などが進むなか、昭和15年(1940)の大火により、町内の約200戸が焼失した。また、戦後は進駐軍による農地改革により、経済界の再編成が行われ、昭和20年代は棚倉簡易裁判所、東白川地方事務所、棚倉税務署などの行政機能が整えられていく。

昭和30年(1955)1月には、棚倉町、社川村、高野村、近津山岡組合村を合併し新制「棚倉町」が発足した。

昭和40年代になると上水道の給水が開始され、小中学校の新改築、中央公民館の新設、学校給食センターの完成などインフラや教育施設の整備が進められていった。さらに、昭和50年(1975)、中学校跡地を運動場として整備し、町総合体育館が完成する。また、町史編さん事業が完了し生涯学習に関連するハード面・ソフト面の事業が完了していった。平成2年(1990)には、複合施設であるルネサンス棚倉がオープンし、平成7年(1995)に棚倉町文化センターが開館している。

6 棚倉町の中世・近世城館

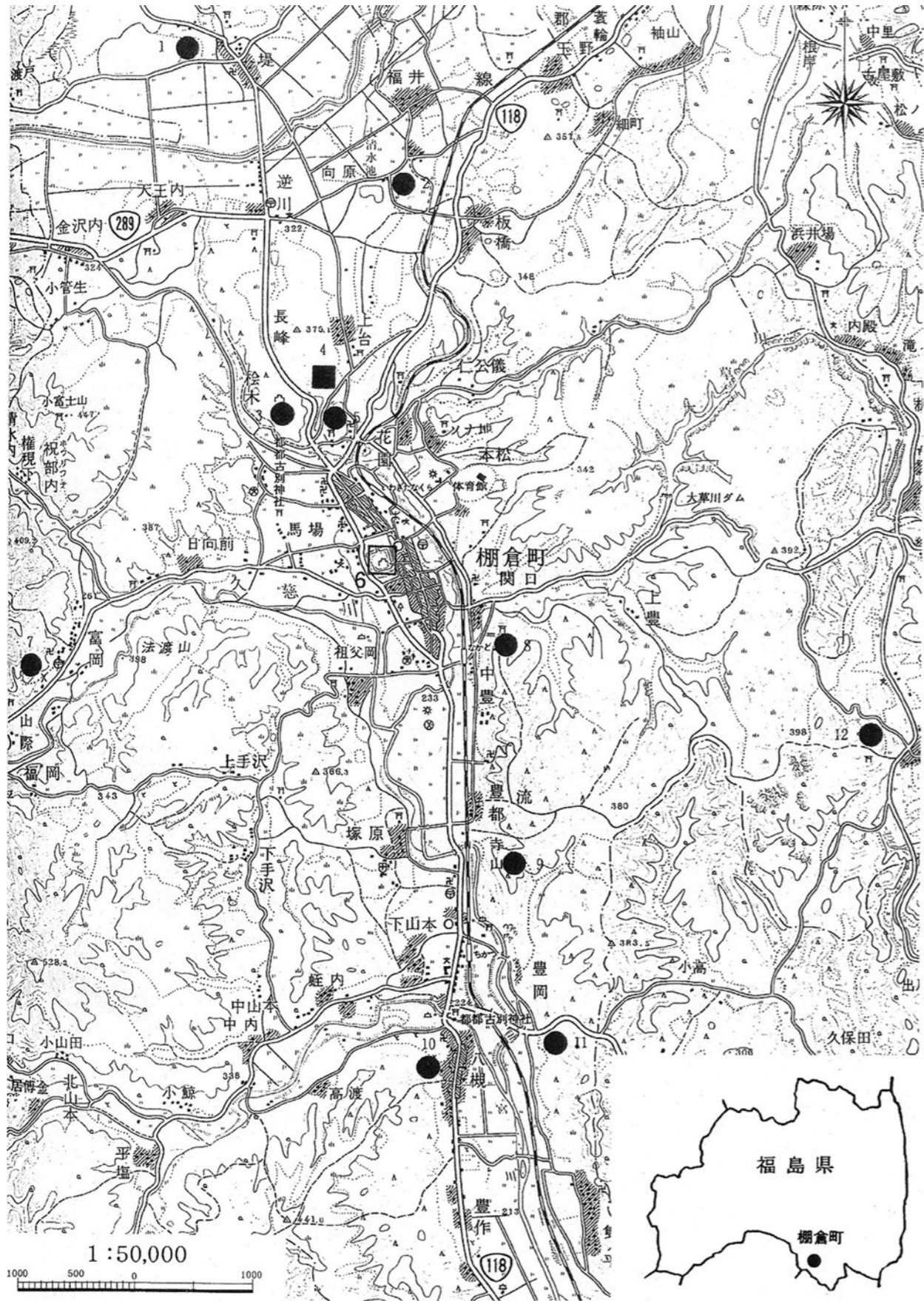
棚倉城跡の立地する周辺には、棚倉城築城以前に棚倉の中心拠点であった赤館跡などが存在する。赤館跡は棚倉町の中心市街地から北に約1kmの社川と久慈川との分水嶺に位置する。南側からの比高約70m、標高約345mの山城で、800m四方の広大な範囲を有し、本城・別郭・外郭の3区画から成る。現存する遺構は土塁と空堀である。

戦国時代において白河結城氏、蘆名氏、佐竹氏、伊達氏による領地争いにより目まぐるしく替わり、慶長11年(1606)に立花宗茂が入封し初代棚倉藩主となる。のちに丹羽長重により棚倉城が築城されると廃城となり役目を終える。

第2表、第3図は、棚倉城跡周辺の主要関連遺跡の概要である。

第2表 棚倉町中世・近世城館一覧(『棚倉城跡』より)

No.	城館名	所在地	現存遺構
1	古矢鎌館跡	堤字池下、薬師下	郭、空堀、土塁、土橋、堀底道
2	中丸館跡	板橋字日照田、福井字中丸	郭、空堀、土塁、土橋、虎口、櫓台
3	赤館跡	棚倉字風呂ヶ沢、桧木字芋畑沢	郭、空堀、土塁、土橋、堀底道
4	花園館跡・赤館跡 (上台地区)	上台字カハキ沼、長峰、花園字沢目	郭、空堀、土塁、土橋、虎口、堀底道
5	鹿子山館跡	花園字鹿子山、棚倉字風呂ヶ沢	郭、空堀、土塁、堀底道
6	棚倉城跡	棚倉字城跡	本丸、土塁、内堀、二ノ丸石垣
7	千石館跡	山際字千石	郭
8	東山館跡?	流字東山	腰郭
9	寺山館跡	流字豊山、寺山字久沢	郭、腰郭、土塁、枳形虎口、櫓台
10	八槻館跡	八槻字大宮	郭、空堀、土塁
11	金井館跡	寺山字長畑	郭、腰郭、土塁、櫓台、堀底道
12	三上(城)館跡	岡田字入沢	郭、腰郭、空堀、土塁、堀底道



第3図 棚倉城跡と周辺遺跡地図

7 棚倉町の指定文化財

棚倉町には、国指定史跡の棚倉城跡をはじめとして、貴重な文化財が数多く遺され、指定文化財として保護されている。以下に指定文化財の一覧を掲載する。

第3表 棚倉町の指定文化財一覧表

別	種類	指定年月日	名	称	所在地
国	史跡	平26・3・18	流廃寺跡		流
"	史跡	平31・2・26	棚倉城跡		棚倉
"	重文(工)	昭25・8・29	ナガフクリンタチ 長覆輪太刀 1口		馬場
"	重文(工)	昭25・8・29	長覆輪太刀 1口		"
"	重文(工)	昭34・6・27	アカイトオドシヨロイヅクツ 赤絲威鎧残闕 1括		"
"	重文(工)	昭36・2・27	ドウバチ 銅鉢 4口		八槻
"	重無形民文	平16・2・6	ツツコワケジンジャ オタウエ 都々古別神社の御田植		"
"	重文(建)	平26・12・10	都々古別神社本殿		馬場
"	重美(工)	昭18・10・1	ドウショウ 銅鐘 1口		新町
"	重美(彫)	昭19・7・6	キツクリジウイチメンカンノンリュウゾウ 木造十一面観音立像 1軀		八槻
県	重文(書)	昭30・2・4	シヨウゴインドウコウタンザク 聖護院道興短冊 1幅		八槻
"	天然記念物	昭30・2・4	フタハンラジンジャ 二柱神社のスギ		寺山
"	重文(工)	昭30・2・4	ドウセイツリトウロウ 銅製釣灯籠 2基		八槻
"	天然記念物	昭51・5・4	棚倉城跡の大ケヤキ		城跡
"	重文(書)	昭53・4・7	モンジヨ 八槻文書 242点		八槻
"	重有民文	昭54・3・2	コメン 八槻都々古別神社の古面 17口		八槻
"	重無民文(芸)	昭54・3・23	八槻都々古別神社の神楽		八槻
"	重文(工)	昭57・3・30	八槻都々古別神社御正体		八槻
"	重文(工)	昭57・3・30	馬場都々古別神社御正体		馬場
"	重無民文	昭63・3・22	オマスミヨウジンマスオクリギョウジ お榊明神の榊送り行事		福井・玉野・一色・蓑輪
"	重文(工)	平8・3・23	銅鉢 1口		八槻
"	重文(工)	平15・3・25	ホコガサイグ 銚形祭具 3本		馬場
"	重文(考古)	平15・3・25	流廃寺跡出土金銀象嵌鉄剣 1口		棚倉
"	重文(古文)	平17・4・15	都々古別神社文書等 22点		馬場
"	重文(典籍)	平20・4・4	大般若経 600帖		八槻
"	重文(建)	平25・4・5	八槻家住宅 旧主屋及び書院棟・ 表門・脇門 4棟		八槻
"	重文(建)	令1・10・15	八槻都々古別神社本殿・隨身門 2棟		八槻
町	天然記念物	昭54・5・30	希望の桜		逆川
"	天然記念物	昭54・5・30	ハナソノ コウヤマキ 花園の高野槇		花園
"	有形	昭55・5・31	蓮家寺山門		新町
"	重無民文	昭61・10・20	お榊明神遷座の行事		福井・玉野・一色・蓑輪
"	有形	平18・3・24	阿部正備茶室		棚倉
"	有形	平19・4・2	銅造十一面観音菩薩坐像		八槻
"	有形	平19・4・2	銅造観音菩薩立像		八槻
"	有形	平19・4・2	銅造地藏菩薩立像		古町
"	有形	平19・4・2	木造大黒天立像		馬場

第2節 棚倉城跡の概要

1 棚倉城成立の歴史的背景

関ヶ原の戦い以前は佐竹義宣が棚倉を領しており、その際の統治の中心は赤館であった。続いて棚倉に入った立花宗茂は、はじめ寺山館に入り、加増後赤館に入るが、実際には後の棚倉城付近に「大長屋」と呼ばれる屋敷を建設し、政務を執った。立花宗茂が筑後国柳川藩（現福岡県柳川市）に転封になると、丹羽長重が常陸国江戸崎藩（現茨城県稲敷市）から入封し、まずは赤館に入った。

2 丹羽長重による築城

元和8年(1622)、常陸国江戸崎藩から棚倉に入封した丹羽長重は、寛永2年(1625)にこの地に鎮座していた近津明神（馬場都々古別神社）を現在の馬場に遷宮して、その境内地に輪郭式（本丸・二ノ丸・三ノ丸）の台城である棚倉城を築城した。この地に築城した理由として、城を建設するのに十分な面積が得られ、城の西側が急になっており、外敵から城を守るのに都合の良い土地と判断されたためと考えられている。長重は城郭が未完のまま、寛永4年(1627)に白河へ転封を命ぜられ、替わって内藤信照が入封して城郭の完成と城下町の整備を行った。城名については城の壁が荒土のままであったので「新土城」、近津明神の跡地に築城したので「近津城」とも呼ばれた。丹羽長重は、棚倉入封後すぐには築城せず、まず赤館を統治の中心とし、江戸屋敷の整備など足元をかためた後、寛永元年(1624)9月12日に赤館の築城を幕府へ願い出るが、9月21日にもっと適切な場所がないか確認し上申せよと指示され（「古御奉書写全」『二本松市史』第5巻）、ただちに現在の棚倉城の場所が選地されたと考えられる。棚倉城は当時、馬場都々古別神社の社地であり、同年10月16日には丹羽長重が馬場都々古別神社に10石を寄進することが決定し（「丹羽長重寄進状写」『棚倉町史』第2巻）、10月20日に替地が譲渡される（「近津大明神築城のための替地検地帳」『棚倉町史』第3巻・「馬場都々古別神社替地相渡状写」『棚倉町史』第3巻）。神社別当の高松氏の隠居を還俗させて藩家老として迎えられ、同年10月23日には神社の仮殿が完成している（「東白川郡沿革私考」『棚倉町史』別巻3）。翌寛永2年(1625)1月13日には前年10月の寄進が実行され（「丹羽長重近津大明神へ神領寄進仕につき田畑渡帳」『棚倉町史』第3巻）、同15日馬場都々古別神社普請開始、翌日16日に棚倉城の普請が開始されている（『東白川郡沿革私考』）。町の大改変を伴ったにもかかわらず、築城の届出から普請に至るまでが4ヶ月足らずと迅速な動きであった。

築城途中の記録は多くないが、城の普請途中である寛永4年(1627)に、丹羽長重は白河へ移封となる。代わって近江国長浜藩（現滋賀県長浜市）から内藤信照が棚倉に入封し、宇迦神社や蓮家寺などの寺社整備を含む城下の整備を引き継いだ。

3 城主の変遷

丹羽長重に変わって入封した内藤家も宝永2年(1705)、駿河国田中藩（現静岡県藤枝市）へ移封となり、代わって太田家が入る。その後も享保13年(1728)から越智松平家、延享3年(1746)から小笠原家、文化14年(1817)から井上家、天保7年(1836)から松井松平家、慶応2年(1866)から阿部家と8家16代の城主が目まぐるしく移り変わる事となる。戊辰戦争さなかの慶応4年(1868)5月、棚倉藩は奥羽越列藩同盟に加わり、新政府軍に落とされた白河城奪還のため出兵するも敗れ、棚倉城も6月24日の攻撃によって落城、黒羽藩の預かり地として新政府軍の支配下となった。同年9月明治へと改元が行われ、9月18日阿部正静は新政府に恭順の意を表す。政府は彼に謹慎を命じ、義理の叔父にあたる阿部正功に家督を譲らせ、改めて棚倉を与えた。その後、明治2年(1869)の版籍奉還、同4年(1871)の廃藩置県により藩としての棚倉は幕を閉じた。

4 棚倉城の廃城

幕末の本丸御殿の様子を示した資料に、慶応3年(1867)の「棚倉城請取渡当日御着座之間并出役之図」（阿部家蔵）があり、建物配置を復元できる。しかし、同4年(1868)の落城の際、藩士によって火が放たれており、一度建物類は炎上したと考えられる。一方、明治初期の城絵図には、門が描かれていることから、建物に対する補修はあったと考えられる。これらの建物も、次項で詳述する多様な再利用の中で破却されていったと考えられるが、それに関する記録は残っていない。

平成17年(2005)の発掘調査で、追手門の礎石が確認された。礎石は通称白河石とよばれる溶結凝灰岩であり、配置から脇戸と脇塀を持つ高麗門であったと想定される。戊辰戦争の兵火ですべての建物が焼失したと伝えられているが、先述の通り明治7年(1874)以降の絵図には追手門が描かれており、焼失を免れたのか、再建されたものであるのか、遺物を伴わない遺構であったため、年代は今後の検討課題であり、現状では礎石の年代は廃城時としておきたい。慶応4年(1868)6月、棚倉藩は奥羽越列藩同盟へ参加し、新政府軍の攻撃を受けて落城する。その際、政府軍の拠点となることを恐れた藩兵たちにより火が放たれ、城や城下はほとんどが燃え落ちてしまったという。

落城後、棚倉城は一旦黒羽藩の預かりとなるが、同年阿部家が政府に恭順の意を表し、正静の叔父にあたる正功が藩主となった。明治2年(1869)に藩校修道館が造られるなどの動きもあったが、同4年(1871)廃藩置県を迎えて藩としての棚倉は幕を閉じた。その後は、棚倉県として一旦は県になるが、その後平県、磐前県となって棚倉には支庁が置かれたとされる。同8年(1875)には、『東白川郡沿革私考』に、「士族家禄奉還せし者へ一旦官より払い下げとなり、残らず伐木せしという。今その切口を余す。大きさ数圍の杉は長重所植の杉である。ああ惜しむべし。」との記述があり、城域の木々を払い下げたようである（棚倉町教育委員会編1984）棚倉城廃城の経過は定かではないが、平成25年(2013)の、町立図書館解体に伴う試掘調査の際、本丸表土から15cm程度で焼土が検出されており、

戊辰戦争時の落城に伴うものと考えられる。

5 近代以降の城跡地利用

棚倉城跡は様々なかたちで利用される。明治20年(1887)、東白川郡会議事堂が追手門跡に建てられ、同30年代には、桜の植樹が行われている(江原2002)。本丸堀は、国から当町へ同31年(1898)より数年にわたって払い下げられ、同40年(1907)には、本丸内に東白川郡立農蚕学校の校舎も建造された。校舎は後の大正8年(1919)に全焼し、結果として農蚕学校は同10年(1921)に移転したようである(福島県立東白川農商高等学校編2009)。

昭和に入ると、本丸跡は運動場などに利用されるようになる。昭和20年代の事と考えられるが、本丸跡が競輪場となり土塁が観客席として利用され、その後に本丸東側が青年会の陸上競技場となる。この際、大手枡形土塁の一部を下濠に入れ、東側土塁の屈折部を直線に改造している様である(江原2002)。その後、軟式野球場を経て昭和29年(1954)には、町民グラウンドとなる。この際、本丸北部の土塁を削っている(金子他2000)。同30年(1955)、町村合併促進法に基づき、棚倉町、社川村、高野村、近津山岡組合村の1町3箇村が合併し、「棚倉町」が成立した際、その合併祝賀町民観桜大会を棚倉城跡で開催している。またこの頃、城跡地は棚倉小学校や棚倉女学校の運動場・球技場として利用される。

本丸には昭和45年(1970)、棚倉町中央公民館及び噴水庭園が、同53年(1978)には町立図書館が相次いで建設されたものの、平成25年(2013)には共に老朽化のため解体され現在は平地となっている。こうした城跡地利用のされ方から、近代以降の城跡(特に本丸)は、一貫して公有地的性格が付されていたと考えられる。

6 棚倉城跡の構造

(1) 棚倉城跡の縄張り

明治期に編纂された『東白川郡沿革私考』によれば、城の規模は次のとおりである。

本丸の四方は多門櫓で土塁上を囲み、二重の隅櫓が4箇所建っていた。本丸は東西33間(約60m)・南北40間半(約73m)の広さで、本丸土塁の高さ3間半(約6.4m)、本丸堀の広さ20間(約36m)、堀の深さ4間(約7.3m)、堀の水深は2間1尺(約3.8m)、二ノ丸を囲む塀の長さが583間(約1,061m)、二ノ丸塀の高さ6尺5寸(約1.9m)、二ノ丸土塁の高さは7尺5寸(約2.3m)、堀の広さは8間(約14m)、堀の深さは3間2尺(約6m)、水深が7尺(約2m)と伝えられている。完成した城下には南から北に水戸街道が通っていた。江戸時代には関東と東北の境目にある城として、親藩・譜代大名が治める城下町であった。棚倉城跡には、巨大な土塁と堀で区画される本丸と、それを取り巻くように南北に長方形の二ノ丸が展開し、その北西に三ノ丸が設けられている(「奥州棚倉城之図」(以下、「正保城絵図」という)。二ノ丸・三ノ丸の北

西に樹木が絵図等で確認されることから、防風林であると同時に防御効果も併せ持つと考えられる。二ノ丸出入口は南門、北に北門、東に追手門が配され、それぞれにL字形の蒔土手が築かれている。

堀は、水堀が本丸・二ノ丸をそれぞれ取り巻き、二ノ丸北西に張り出す三ノ丸(林曲輪)両面下のみが空堀である。

また本丸土塁が特徴的で、本丸内曲輪面から高さ約6m、幅は約7m(基底30m)を測り、四方の隅櫓の位置は約12m程度の平場が形成されている。二ノ丸も土塁で四周していたと考えられるが、現在は北辺の約50mのみが残存し、それ以外は消滅している。

虎口は本丸内に南北2箇所の枡型虎口が、二ノ丸内に4箇所の蒔土塁を伴う虎口が存在し、いずれも門を伴う。

石垣は、二ノ丸西側の崖部に約160mにわたり鉢巻状に構築された。当城は基本的に土造りの城であるため、この方向にのみ石垣を設けたことには、何らかの意図があったと推測される。

本丸内部には藩主の居所・院庁として御殿が設けられた。御殿は基本的に平屋建築で、桧皮ぶきの板部屋であったとされる。

城内の櫓は、本丸土塁上に二重隅櫓4棟、一重櫓1棟が築かれ、各櫓間は多門櫓により隙間なく連結し、その総延長は204間(約367m)と東北随一である。また二ノ丸北東隅には、城下に時刻を告げる時の鐘が設置された。城内の門は、本丸に玄関前櫓門、追手枡形門、北櫓門、北二ノ門が配され、二ノ丸には、北一ノ門、追手門、南門、搦手門、埋門が設けられた。その他、二ノ丸内部には城米蔵・作事小屋・番屋・硝煙蔵などがあり、その他家老クラスの上級家臣団の屋敷地も二ノ丸内部に多く存在した。

また、城及び城下が乗る台地上南端に中世の馬場都々古別神社別当宅を再利用したと考えられる「南御殿」が存在し、藩主の遊興や交際・饗応の場として使用された。

(2) 棚倉城跡の修築

棚倉城跡の修築については、現存する絵図の中に、松井松平家時代の補修箇所を記したものが2点確認されている。1点目は土居の補修箇所を記したもの(「陸奥國棚倉城土居崩之覚」(弘化2年(1845)10月、東北大学付属図書館蔵))で、これによれば、弘化2年(1845)時点の土居崩落計10箇所が示されている。棚倉城内堀は水堀であり、常に水に接して浸食され続ける土塁基底を定期的に修補する必要があったと思われる。また、2点目として、天保7年(1836)～慶応2年(1866)の間に作られたと考えられる絵図が現存している(「棚倉城修補絵図」(川越市立博物館蔵))。補修箇所は9箇所、本丸の多門櫓周辺に限られている点が前者と比べて特徴的である。

2点の絵図は多門櫓の表現などごく一部が異なるものの、ほぼ同様の絵図と見られ

る。一般に補修絵図は、以前の補修絵図を使用することが多いので、それ以前に原因があったかと考えられ、それ以前に修築があった可能性も考えられる。いずれの修築も、詳細については他に史料が残されておらず不明な点が多い。

また改築については、棚倉城跡は中世城郭の再利用ではなく近世初頭に新規築城された城であるため、築城当初から廃城に至るまで、縄張りそのものを変更するような大きな改変は見られない。しかし正保城絵図と、その後の時代に描かれた絵図（元禄12年(1699)～宝永2年(1705)「奥州棚倉絵図」(国立国会図書館蔵『日本古城絵図』所載)ほか)を見比べると、経緯は不明なものの、細部に改築がみられる。こうした細部の改変は、寛文12年(1672)1月の大火や、前述したような藩主の8家に及ぶめまぐるしい交替ごとに城内・城下の細部を造り替えた影響と考えられる。

寛文12年(1672)1月、棚倉城下で起こった大火では、侍屋敷136軒・町屋312軒を焼くとともに、城内の建物の大部分を焼失した(個人蔵「沙汰治帳」)。そのため、築城当初の城内の建造物については、移転・立て直しがあったと考えられる。その証左に、「正保城絵図」(寛永21年(1644)～慶安元年(1648)ごろ作成)には二ノ丸内部に多くの侍屋敷が描かれるのに対し、半世紀後の「奥州棚倉絵図」(元禄12年(1699)～宝永2年(1705)ごろ作成)では侍屋敷のほとんどが城外に設けられるようになっている。また、築城時に「三ノ丸」という呼称が、幕末期から「林曲輪」という呼称に変化している。これらの変化に伴い、記述が簡略化していくことから曲輪として機能しなくなった事も想定される(山川2015)。また築城当初は二ノ丸北東隅に掲げられ、城下に時刻を告げた「時の鐘」は、18世紀初頭の絵図では「太鼓櫓」となっており、改築が認められる(『東白川郡沿革私考』)。

また、棚倉城跡関係の現存建築物として南門があるが、宝永4年(1707)に長久寺山門として移築されており、その後新たな門を建築したと考えられる。

平成12年度の試掘調査で、本丸南柵形虎口内から柱穴及び木製の柱の部材が検出され、柱の間隔などから18世紀以降の遺構と推測されている。

(3) 城下町

棚倉城の城下町は二ノ丸・三ノ丸(林曲輪)を囲む外堀の、さらに外側に城下町が設定され、その城下町を囲む総構えは存在しない。しかし城下町そのものが、棚倉城跡のある台地南端部のほぼ全域を占有しており、その意味では東・西・南3方向は、崖と河川を天然の総構えとしていたとも考えられる。また、城下町は内藤家が藩主の時代に整備が進められたのち、寛文12年(1672)など幾度かの大火があり、町内の多くの建物が消失しているが、大規模な地形改変が無かったため、現在も江戸時代の町割りを変わずに見ることができる。

江戸時代の絵図では、現在の北町・南町を武家地とし、古町・新町・鷹匠町を町人地と記載している。武家地には、侍屋敷と足軽町の2種類があった。城外(外堀の外側)

の侍屋敷は、石垣で固めている城の西側を除いて、城の北部と北東部、そして城の南部と東部に配置され、足軽町は、城南の侍屋敷の南側に設けられていた。町人地のうち古町は、棚倉城の築城以前は近津明神(現馬場都々古別神社)の社地であり、その門前に町が展開したものと考えられる。一方、新町は、戦国期に佐竹氏が地域支配の拠点とした赤館城の城下だったと伝えられ、古町・新町ともに中世からの町場が引き継ぎ形成されており、城郭、武家地、寺社、町人地の身分的・計画的な居住域からなる江戸時代の「都市計画」を十分に伝えることが出来る。また、絵図からは、水戸街道、伊王野道等が通る交通の要衝であったことが読み取れる。この街道の形状や町割りの形状が現在も残っており、「鍵の手(クランク状の道路)」「食い違い(わざとずらして交差させた道路交差点)」といった城下町の特徴的な構造を見ることが出来る。城下町の町割りは間口が狭く奥行があり、江戸時代の「敷地割り」を十分に伝えることが出来る。また、蓮家寺や宇迦神社などが現在と同じ場所に記されており、江戸時代から寺社の場所が変わってないことがうかがえる。

(4) 現存する地表面遺構

先の縄張りのうち、地表面遺構として残るのは、本丸の土塁の大部分、堀の全て、北一ノ門の礎石4基となっている。

二ノ丸は、北部の土塁、また埋められてしまった堀の痕跡も、道路として残る。二ノ丸内部の、追手門の柵形付近に残る県指定天然記念物「棚倉城跡の大ケヤキ」は、近津明神の神木を残したものと伝えられ、樹齢は約600年と推定されている。二ノ丸西側の土塁上には約160mに渡って石垣が残っている。高さは8段(石)程度で南側半分がやや高く、平均で3.2mの鉢巻石垣である。二ノ丸石垣直下の堀跡は、長く水田として利用されていたが、昭和47年(1972)の町立棚倉中学校の建設に際して埋め立てられた。

なお、三ノ丸は宅地として利用されていて、地上遺構のほとんどは消滅している。

第4表 棚倉城跡関連年表

棚倉城関係年表		
年代	内容	出典
元和8年(1622)正月11日	丹羽長重、常陸国江戸崎より移り、5万石で棚倉藩主となる。	国立公文書館蔵「譜牒餘録」(『大日本史料』12)
寛永元年(1624)9月12日	丹羽長重、「赤橋之城」の普請許可を幕府より得る。	「赤橋白川城普請二本松侍町往還道筋普請之時御奉書写」(「譜牒餘録」)、丹羽長聡家蔵「古御奉書写 全」(『二本松市史』5巻)
寛永元年(1624)9月21日	丹羽長重、幕府から赤館以外の城地について、自身が棚倉に下り検分し、改めて上申するよう指示を受ける。	同前
寛永元年(1624)10月20日	棚倉城築城に際し、近津大明神(現馬場都々古別神社)替地のための検地が行われる。同日替地の譲渡。	「棚倉城築城のため近津大明神替地検地帳」(『棚倉町史』3)、「馬場都々古別神社願替地渡状写」(『棚倉町史』2)
寛永2年(1625)1月15日	近津大明神社殿の移築普請開始。	「東白川郡沿革私考」(『棚倉町史』別巻3)
寛永2年(1625)1月16日	丹羽長重により築城が開始される。	「棚倉城築城のため近津大明神替地検地帳」(馬場都々古別神社蔵)、赤橋白川城普請二本松侍町往還道筋普請之時御奉書写(国立公文書館蔵「譜牒餘録」)
寛永2年(1625)月日不詳	近津大明神別当高松良篤、神社のみならず居宅を差し出す。	「高松加兵衛良篤伝記」(棚倉町立図書館蔵「東白川郡沿革私考」)
寛永3年(1626)5月13日	丹羽長重、近津大明神境内へ禁制発給。社内安全を藩主が保障。	「近津大明神社境内立入につき禁制」(『棚倉町史』3巻)
寛永4年(1627)	丹羽長重、白河へ転封。近江国長浜藩より内藤信照入封。棚倉城完成。棚倉城下や宇迦神社・蓮家寺など寺社も整備。	「三之附録」(『二本松市史』第5巻)、「東白川郡沿革私考」
寛文12年(1672)	城下町にて大火発生し、448軒が焼失。城内も「北ノ丸」「大工蔵」「御城御蔵」を焼く。内藤信良藩庫内の粗などを放出。	井上家蔵「明暦元年より貞享二年まで 沙汰治帳」
元禄12年(1699)	棚倉城内に鐘を鋳て懸ける。	「東白川郡沿革私考」
宝永2年(1705)	内藤支信、駿河国田中藩へ移封。太田資晴、駿河国田中藩から入封。	「東白川郡沿革私考」
正徳5年(1715)	秋田藩土前小屋民部忠利・平山半左エ門が常陸国へ向かう際に棚倉に宿す。	「常陸御用日記」(秋田県公文書館蔵「佐竹西家文書」(『常陸大宮市史』)
享保13年(1728)	太田資晴、棚倉城南門を花園村長久寺へ移し山門とする。	「東白川郡沿革私考」
享保13年(1728)	太田資晴、上野国館林藩へ転封。松平武元、館林藩より入封。	「東白川郡沿革私考」
延享3年(1746)	松平武元、上野国館林藩へ転封。太田資俊、上野国館林藩より遠江国掛川藩へ転封。小笠原長恭、遠江国掛川藩より入封。(三方領地替え)	井上家蔵「奥州棚倉指出帳」
明和5年(1768)	小笠原長恭、御城門土手の草刈を新町・古町住民に命じる。古町下木戸・下町坂下土橋架け替え、町堀沿い石垣普請、宇迦神社下の板橋普請を行う。「南御殿」で八槻村大善院相撲を行う。	井上家蔵「明和五年子三月吉日日記」(『棚倉町史』別巻1)
享和3年(1803)閏正月21日	長岡藩士の長沢茂好と柳町年綱、棚倉城下に入り偵察する。	福島県立図書館蔵「陸奥能備篇」上巻
文化元年(1804)3月12日	城下で大火があり、御城と古町・鉄砲町水口まで焼ける。	古市性司氏蔵「萬葉帳」(『矢祭町史研究(2) 源蔵・郡蔵日記』)
文化14年(1817)	小笠原長昌、肥前国唐津藩へ転封。水野忠邦、肥前国唐津藩から遠江国浜松藩へ移封。井上正甫、遠江国浜松藩より入封。(三方領地替え)	「東白川郡沿革私考」
天保7年(1836)	井上正春、上野国館林藩へ転封。松平斉厚、上野国館林藩より石見国浜田藩へ移封。松平康寿、石見国浜田藩より入封。(三方領地替え)	「東白川郡沿革私考」
天保15年(1844)3月20日	二本松藩領内で激しい風が吹き、二本松城の屋敷・門・木・城下町などが大破。	池田正一郎「日本災害通志」649p(福島地方気象台編)
弘化2年(1845)10月	棚倉城内の土居下部の崩落地点10箇所を修補。	東北大学図書館蔵「陸奥国棚倉城圖」(陸奥国棚倉城土居崩之覚)
弘化3年(1846)	白河城の櫓破損箇所を修補絵図作成。5箇所の櫓でいずれも屋根下地と壁の破損。翌年のもう一点作成し、そちらを提出。	学習院大学蔵「阿部家文書」
安政年間	棚倉城南門外の小糸坂下に工場を建設し、西洋新式の大砲5門を鋳造する。	松尾豊材「棚倉藩政回顧録」(標註編纂山内一郎『松平周防守時代の棚倉藩政回顧録』)
元治元年(1864)	松平康英、天狗党騒乱を鎮圧。	「東白川郡沿革私考」
慶応2年(1866)	松平康英、武蔵国川越藩へ転封。松平直克、武蔵国川越より上野前橋に立藩。阿部正静、陸奥国白河藩より入封。(三方領地替え)	「東白川郡沿革私考」
慶応4年(1868)	阿部正静、奥羽越列藩同盟へ参加。白河城奪還のため出兵・敗戦。	「東白川郡沿革私考」
慶応4年(1868)6月24日	棚倉城自落。	「東白川郡沿革私考」
明治2年(1869)	本丸内に鎮護神社が造営される。棚倉藩知事阿部正功、藩校修道館を設置。	「東白川郡沿革私考」
明治4年(1871)7月	廃藩置県にて阿部正功が藩知事を免じられ、棚倉県になる。	「東白川郡沿革私考」
明治4年(1871)10月	棚倉県が平県に編入され、藩校修道館が廃止に。翌月、平県を磐前県と改称する。	「東白川郡沿革私考」
明治8年(1875)	城内の木が払い下げられる。	「東白川郡沿革私考」
明治20年(1887)	東白川郡役所が追手門跡に置かれる。	「東白川郡沿革私考」
明治23年(1890)	本丸内にて兵役慰労のため彰武会を開催。	「東白川郡沿革私考」
明治37～38年頃	城地に500本以上のサクラを植樹する。	江原靖男「棚倉城跡の私考」(『棚倉史談』10、2002年)
明治40年(1907)	本丸内に東白川郡立農蚕学校の校舎を建てる。	「福島県東白川郡立農蚕学校一覽」(『陣野正治家文書』)
大正8年(1919)	東白川郡立農蚕学校の校舎が全焼する。	「福島県東白川郡立農蚕学校一覽」(『陣野正治家文書』)
大正10年(1921)	東白川郡立農蚕学校移転	「福島県東白川郡立農蚕学校一覽」(『陣野正治家文書』)
昭和20年代	本丸跡が競輪場になる。土塁は観客席として利用される。	江原靖男「棚倉城跡の私考」(『棚倉史談』10、2002年)
昭和20年代	本丸東側が青年会の陸上競技会場となる。大手升形土塁の一部を下濠に入れ、東側土塁の屈折部を直線に改造。	江原靖男「棚倉城跡の私考」(『棚倉史談』10、2002年)
昭和20年代	本丸跡を軟式野球場とする。南西隅の鎮護神社盛土箇所にホームベースを設置し、鎮護神社は北東部隅櫓の位置に移動。	江原靖男「棚倉城跡の私考」(『棚倉史談』10、2002年)
昭和29年(1954)	本丸跡を町民グラウンドとする。本丸北土塁を削り北側に寄せる。	江原靖男「棚倉城跡の私考」(『棚倉史談』10、2002年)
昭和30年代	棚倉小学校・棚倉女学校の運動場・球技場として利用される。	江原靖男「棚倉城跡の私考」(『棚倉史談』10、2002年)
昭和43年(1968)	本丸平場に棚倉町中央公民館が建設される。	藤田直一・山川千博「棚倉城跡1」
昭和53年(1978)	本丸平場に棚倉町立図書館が建設される。	藤田直一・山川千博「棚倉城跡1」
平成24年(2012)	国指定史跡化を目指して調査を開始	
平成25年(2013)	本丸平場の中央図書館の解体・図書館の移築に伴う調査	藤田直一・山川千博「棚倉城跡1」
平成27年(2015)	本丸土塁上の多門櫓確認調査	棚倉城跡平成27年度発掘調査現地説明会資料
平成31年(2019)	棚倉城跡が国史跡に指定	